

伊豆の民謡

——稲作習俗と田唄——

石川 純一郎

大田植の研究は早くから着手され、近年「田植草紙」の資料翻刻と研究が盛んにおこなわれたことは知られる通りである。

「田植草紙」の成立に関する史的研究と、大田植および「田植草紙」の構造およびその成立基盤にかかわる民俗学的研究は興味深い。それらの研究立場がいわば国文学・芸能研究であるのに対して、私の立場は民俗学であり、しかも東国伊豆地方における田植え習俗と素朴な労作唄とを構造的にとらえてみようとするものである。

伊豆は歴史も古く、地形も複雑で、いろいろと興味のある地域である。ここには田唄や庭唄を中心に古風な民謡が豊かに伝承されている。にもかかわらず、これまであまり注目されることがなかった。此度は伊豆における田植え唄を中心に研究発表をしたい。

最近伊豆の民謡を採録する機会に恵まれて、丁寧に調査してみると、田植の日の一日を区分して朝田・昼田・ヨウジャ・ヨウダなどの名称があり、またその時々々に歌う決まりの唄と、時に制約されない唄のあることが判明した。これは田植が儀礼としておこなわれていたことの名残りであろう。

西日本のサゲ田地帯における花田植えないし田植え唄は朝のノサノバイ降ろしに始まって晩のノ神送りノまで儀礼としての首尾一

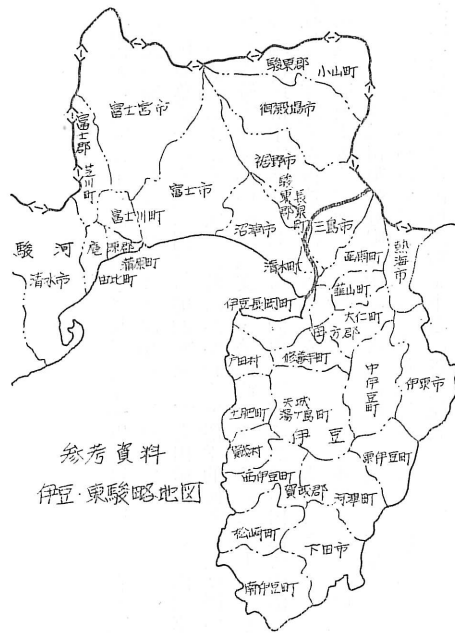
貫した形を保持している。こうした儀礼の色合いは北に行くほど稀薄になるが、伊豆および関東地方の一部に分布する比較的形の整った伝承は、東西日本の稲作儀礼の上でどのような意義を有するであろうか。

京の都を分水嶺とも水源ともして東西に流れくだる田唄の流れをみると、東西二つの形態のあることは、わが国の民俗文化にとつてゆるがせにできない問題でもある。

二

伊豆国は『扶桑略記』に「天武天皇の九年（六八〇）駿河国の二郡を分けて伊豆の国となす」とあり、そのころ田方・賀茂の二郡が駿河国からの分国のもとに成立したのが始まりである。また、伊豆は「湯出の義」であろうとしている。実際、断裂構造が発達し、各所に温泉の湧出がある。伊豆はさほど大きくもない半島ながら、かなりの山国で天城山系の万三郎岳（一四〇五M）を主峰とする馬蹄型の山脈が口伊豆と奥伊豆とを二分している。天城山系を境に北は田方郡、南は賀茂郡となっている。

田方は畑方に対する語で、田所をあらわす地名である。天城山中に発する狩野川と箱根山・富士山の間が発する黄瀬川とがもたらした肥沃な耕土と、温暖な気候とがあいまって、古くから稲作農耕を



参考資料
伊豆・東駿略地図

盛んならしめてきた。葦山の山木遺跡は弥生時代の農耕生活を宿すもので、大和の唐古遺跡、近江の大中湖南遺跡、駿河の登呂遺跡とともに貴重なモニュメントである。山木の農耕集落は狩野川下流域の低湿地帯に成立したもので、そのため土器はもちろん、イネはじめ穀物や果実の種子、田下駄・エブリなどの生産用具、臼・杵・片口・杓子などの木器、水田畦柵・高倉などの遺材の出土をみている。また、三島扇状地には条里遺構がある。これらは高度な古代農耕社会の存在を窺わせるものである。平安末期に源頼朝が蛭ヶ小島に流され、この地に兵を挙げたこと、近世末期の代官江川太郎左衛門が反射炉をもって大砲鑄造をおこなったことなどのほか大きなトピックもあまりなく、比較的安穩な農耕生活が続けられた。

一方の賀茂は賀茂神社の神人やその信仰にゆかりのある地名である。地勢は天城・猫越山系と南部丘陵地帯の山地からなり、河川下流に谷底平野がみられるばかりである。

本稿ではまず口伊豆即ち北豆における田植え唄と稲作習俗について、事例を挙げて考察し、次に奥伊豆即ち南豆の田植え唄との比較をおこないたい。

田方郡中伊豆町上白岩小川では下村フク（明治三十六年八月誕生まれ）、室野フユ（大正三年修善寺大野馬渡生まれ）の両唄から苗取唄五番、田植唄二〇番を採録した。主な田植え唄の詞章は次の通りである。

- 朝唄 ハヤレ今朝の露でな ヤレニかまをみがき給えよな
 昼唄 A) 箕と柗とト（斗掻）を持ちて 裏へ廻り鍵取り
 B) ええ紫の小袖で 玉禪ねじ上げて
 C) お昼中の早乙女は 一時しおれしおれた

夕唄 A^ハ

大日見やれ太郎次殿 大日は山にかかるぞ

B^ハ

ヨウダを植えてはよ植えて 太郎次殿と寝て行こう
太郎次殿は年寄り 小太郎次殿と寝て行こう

時無し A^ハ

歌いそうで舞いそうで 縁に腰をかけそうで

B^ハ

話しやめなよ唄なら歌え 話しや仕事の邪魔になる

C^ハ

十七八を揃えて 金襴の褌で 笠は加賀の糸縫い

朝唄、昼唄、夕唄が揃っており、貴重な伝承といえるだろう。時無しというのは、その合間に随時歌われる唄である。これらの唄は八幡および小川において明治末から大正時代にかけて、田植え時に歌われたものである。

当地方ではイイトて数戸の農家が協同して田植えをする。初田植えをサオリ、その田圃をサオリ田という。

まず植えがけに朝唄を歌う。詞章の考説は措くとして、当地では必ずこの朝唄を歌ってから植えにかかる。次は昼唄―これは場面に応じて機能的に歌われる。

A、昼飯の一時間ぐらい前に準備にかかることを関係者に促す。

B、昼飯時に、その日の田持ちの新嫁や娘が食物などを盛る際に歌う。

C、昼休みをきりあげて、午後の田植えにかかった際に歌う。

次に夕唄―これには夕景を叙したものとや田植えの終了についてさまざまな情意を表現したものなどがある。

A 夕陽の山の端にかかる時分に、田持ちに田植えの終了を促す。

B この田を植えてしまえば、もう今日の仕事はおしまいだというような際に歌う。

次は時無し―これにはいろいろの唄がある。朝昼夕の時に関係な

く、事中随時歌うものである。

A 唄が出そうでない時に歌う。

B 田植え最中に話しをすると手が遅くなるので、唄を歌って制止する。

C 早乙女の装束を叙したものである。

上白岩での早乙女の装束は紺がすりの着物を着、裾をはしより、帯に挟む。それから、赤褌をかけ、糸縫い笠に紺のテッコウというものである。その日の田主即ち田持ちは早乙女に褌や手拭をご祝儀としてとらせる。一つ一つの唄がそれぞれ機能を担っているところに労作唄としての意義が認められる。

朝唄はいわば田植えの開始に相応しい唄、言葉を変えれば田植えの開始にあたって歌われなければならない唄で、そういう場面の唄にはいろいろな意義を有するものがあるが、もとも重要な意義は田の神降ろし、あるいは言寿ぎにある。中伊豆町あたりでは「今朝のささの露でな」の朝唄が一般的であるが、その意義のもう少し明瞭な朝唄が大仁町あたりには伝承されている。

大仁町吉田では原志ほ（明治三十八年吉田生まれ）、菊地きよ（明治三十四年修善寺町熊坂生まれ）の両媼から苗取り唄二番、田植え唄九番、草取り唄五番を採録した。

朝祝い^ハヨオイ昨日までは小田原 ヨオイ今日はお山を申すらん

(参ろうよ)

昼唄^ハ

お昼中の早乙女 ひとしおりしおれた

夕唄 A^ハ

ヨウダ植えてはや植えて 太郎次殿と寝て行こう

B^ハ

太郎次殿は年寄り 小太郎次殿と寝て行こう

あがりはかの早乙女は 銭を撒いても拾うまい 金

を撒いても拾うまい

その他 A へ 渡り田の稲はよ 千石千段あるとな

B へ よしろだよいしろだ 大阪^阪しろでよいしろだ

C へ ここは殿の見降ろし よおく植えろ 早乙女

D へ 想う人の田なれば こないぼそに こざくに

ざっとこの程度の田植え唄が大正時代には歌われていた。当時は一〇番前後の唄をもって、これを繰り返し歌いつつ一日の労作を充たしていたのであった。

吉田の朝唄、これは朝祝いに歌ったものといわれる。唄にある「お山」は相模の大山である。頂上に大山阿夫利神社が鎮まっている。雨降山の別名があるように祭神は水の神、農耕の神である。大山参りは江戸時代にたいへん盛行をみたそうだが、北豆では今もって続けられている。

吉田には上町・仲町・下町と三つの講組があつて、陰曆三月三日の節供を期して代表たちが登拝し、帰つて来ると、その夜はお振舞をして講中にお札を配る。中伊豆町の徳永南では元旦に男衆が代参し、お札と筒粥表をいだけて来る。受けたお札はめいめい家の神棚に一旦まつりおさめる。これを「大山さんのおまぶり」と称して種籾を蒔き終えた苗代の水口に立てる習俗は広く北豆一带に残存している。ミノグチマツリと称する稲作儀礼は、小正月の成木責め即ちナラズカに用いた祝い棒と粥搔棒とを、水口の畔に立て先端の割れ目にお札と筒粥表を葉蘭などに包んで挟む。所によつては粥搔き棒の先に団子などを挟む。それからトリノグチとて焼^{ホマ}米を供えて、苗の生育の順調ならんことを祈願する。なお、中伊豆町ではミノグチマツリの際に躑躅の枝(関野)とか卯の花(小川)をも差す。

* 正月四日の初山の際に伐つておいたカツノキ(ヌルデの異称)

を掃粉^{ホコ}木ほどの大きさに小切り、元の方を残して末の皮を削る、あるいは先を細く削るなどする。この祝い棒をナラズカまたはコンゴウといい、多くは別にもう一本粥搔き棒を用意し、木口に一文字または十字字に割れ目を入れる。通常男子二人一組となつて長上が祝い棒でもつて成り木の幹を叩きながら、「なるか、ならぬか、ならぬとぶつ伐るぞ」といつて責める。

やがて田植えの時を迎えるが、伊豆・駿河一带では、植え初めの日をサオリまたはサヨリとよぶ所が多い。そういう初田植えの開始にあたり、吉田では朝祝いとして「昨日までは小田原」の唄を歌う。夕唄の B はこの田圃を植えてしまえば今日の作業は終了だという時の唄で、早くあがりたいたいという早乙女の気持ちが表されている。「あがりはか」の「はか」は苗を植えようと予定した範囲や分量をいう。

その他の唄はそれぞれに機能を有している。

A、渡り田即ち一枚の田を植え終えて次の田にかかる時に歌う。

B、「城」に「代」を掛けた代耨めの唄である。

C、この田は詞章にも明らかのように特に念入りに植えるという意である。

D、上手な苗の植え方を教える唄で、「こないぼそ」は苗の本数の少ないこと、「こざくに」は間隔の細かいことをいう。

さて、サオリは田の神が降りられることをいうのであろう。今度、田植えがすっかり済むとサノボリとか農休みと云つて、御馳走をいだけて骨休めをする。これによりサオリとサノボリは対応してサの神の来去をいうことがわかる。ただし、サオリ田に対して当地にはシメエ田があり、朝ないし初田植えの際に降ろしたサの神を夕な

いし田植え仕舞に送る習俗のことは、中伊豆町冷川の例から察せられる。鈴木暹氏採録の資料には仕舞田の唄がある。杉本ます媪（明治三十一年地藏堂生まれ）の伝承するものである。

昼唄 A ヤレエ上白米をとごうよな ヤレエ柳桶でとごうよな

B ヤレエ山々の葛の葉 たぐれござれ盛ろうよな

C ヤレエ一本のすすきを 持て来よ箆に折ろうよな

夕唄 ヤレエ 宵田を植えると聞いたなら 松明巻いて来ようもの
仕舞田 ヤレエ (上句、忘却) 来年ござれ田の神

「来年ござれ田の神」という下句だけ記憶に残り、上句を欠いている。ただし、これは古い地誌類の資料で補いがつく。『田方郡誌』には、

〔別れるる田の神 来年参らう田の神

の歌詞がみえる。これは修善寺町旧狩野村の唄である。

仕舞田の習俗は押さえておく必要がある。豪農をお大家といいか家のお勝手がえらいか」といわれたほど多勢の人手を集めて盛大におこなったという。最後に残った田即ち仕舞田になると、「はやをとばす」として二頭の裸馬を田に放って大いに駆けさせる。馬が急カーブをきるはずみに手綱を握っている人があおりをくらって投げ出され、泥まみれになる。これがなかなかの呼び物で村人たちがみな見物して楽しんだという。それから田植えをすませ、「また来年ござれ」といって田の神を送り、その晩は振舞がある。これはドロブチの習俗に通ずるものであろう。三島市や沼津市の一部には最近までドロブチがおこなわれていたという報告がある。仕舞田に早

乙女たちが互いに入り乱れて泥を打つけ合うのであるが、これは誰からともなく自然に始められる。最初の標的は新嫁とか、初子を持って間もない人で、みなから祝福される。それから泥合戦となり、みな泥まみれになる。そこで泥の打合いをやめ田を植えておしまいにするのである。

サオリから仕舞までの間、田の神をまつる。つまり田植えは田の神祭りの側面を有している。冷川の昼唄には田の神を饗応する心意があらわれていよう。昼食の接待にあたる田持ちの娘は重い役割を担っている。そういう観点からふりかえると上白岩小川の昼唄Bは、単なるお給仕を称える唄ではなかったことが察せられる。

杉本ます媪伝承の昼唄に田の神祭りの印象が刻されている。柳桶 // 葛の葉に盛る // 一本のすすきの箆 // によく表われている。夕唄は晩方遅くまで田植えを続けさせられていることをかこつ唄である。

田唄の採録をおこなった二つの集落の田植えの日の時の区分と名称は次に示す通りである。一軒の農家の田植えは一日ですますのがならわしで、田所ともなると手許が見えなくなるまでやる。

唄の区分

区	中伊豆町 上白岩小川	大仁町吉田
6		新田
7	新田	
8		ヒルメシ
9	ゴヒル	
10	新田	
11	ヒルメシ	ヨウサ
12	ヨウサ	
13		ユウシヤ
14	ユウシヤ	
15		ヨウサグリ
16	ヨウサ	
17		ヨウサグリ のヨウサグリ

これまでの事例で北豆の田植え唄の伝承状況ならびにその背景に

ほの見える田の神信仰、そしてこれら総体の基盤をなしている、田植への習俗のあらましをみてきた。

三

ここで南豆の田植え唄の若干を参照してみたい。

朝唄へ 今日の田の田の水口に 植えたる松は何松 長者松に姫松

田主の植えたる若松 (『南豆風土誌』『日本民謡大観』)

代をかく殿の腰よ見れば 咲くぞよ脇に黄金花

(『南豆風土誌』)

昼唄へ 昼坂越えて寝たる夜は 枕に髪が定まらぬ

(『南豆風土誌』『大観』)

夕唄へ 上がれとおしゃれ太郎次殿 一度で人は懲らざりよか

(『南豆風土誌』)

仕舞唄へ おおさの真ん中で唄一つ落といた 落といたも道理こそ

よ 若い時のならひだもの (『南豆風土誌』)

こうした役唄をみるかぎり、北豆と異質であることがわかる。南豆は天城山系を介して北豆に接しているほかは海に囲まれているので他に隣接地草求めようがないので、ここを田唄の一つの伝承圏とみなすことができる。ただし、役唄としての機能はないが、その多くは北豆に類唄が見出せる。類唄がないのは昼唄だけである。とはいえ、全体を比較するとやはり違いがめだってくる。南豆の田唄は天城山系の細道を伝って北豆からもたらされたものであろうことは想像に難くない。

北豆における田唄の伝承圏については一時保留し、あとで触れた

い。

先に掲げた文献に収録された資料をも援用して田唄を集成したところ類唄の扱い方で異なるが、おおよそ苗取り唄は十五番、田植え唄は三十番、草取り唄は十五番ほどに収斂される。次にめばしいものを拾いあげてみよう。

伊豆の田植え唄集成(抄)

植える松は何松 太郎次を祝う若松 (大仁町〈北豆〉)

代かき殿の腰を見なよ 夢を見れば咲いたよ腰に 黄金花

(中伊豆町地藏堂〈北豆〉)

上がれといいな太郎次殿 一度に人が懲らざりよか

(二句、四句繰返す)(天城湯ヶ島町〈北豆〉)

おおさのなかに落とした 何を落としたもうよな 唄を落とし

たもうよな (中伊豆町冷川〈北豆〉伊東市宇佐美〈南豆〉)

ならせならせ田をならせ ならさぬ声が寝声だよ

(賀茂村〈南豆〉)

ならせならせ田ならせ肥ならせ ならさぬ肥はねごい田よねご

い田よ (天城湯ヶ島町〈北豆〉)

能く植えて 早う植えて (以下略す) (下田市〈南豆〉)

*『南豆風土誌』による

鹿島の沖で音するは 清盛さまの召船か (西伊豆町〈南豆〉)

お伊勢船が着いたとな 昨日千艘今日千艘船の上乗は天笠三

郎 よそ三郎 よそ三郎の船にこそ 綾や錦を帆に巻いて

(大仁町〈北豆〉)

四番までは南豆の役唄の類唄ないし共通唄である。五番と六番は

双方の類唄を並べた。田植えに唄はつきもの、しかもよい声で歌えば神も人もお気に召す。北豆の唄は元唄ともいうべき南豆の唄を歌いゆがめたもの。こうしてみると南豆と北豆の田唄のどちらが古いかはにわかには判断できないように思われる。

次の唄は「以下略す」とあるが、その意は知れている。「太郎次殿と寝行こう」と続くのである。

仕舞の二つの唄は、こうした芸能的な唄とはいっていいという見本である。ただし、この類の唄はさして多くない。

四

まとめの一端を述べるならば、全般的にみて伊豆の田唄は労作唄としての元唄に近いものが多く伝承されていたこと、それらの唄は儀礼的な要素を有し、田の神祭りの心意を反映していること、南豆を一つの分布圏とみなしうることなどである。また、一定地域における伝承から田唄の基本的な組織と伝承の状況、地勢との結びつきなどがうかがわれる。

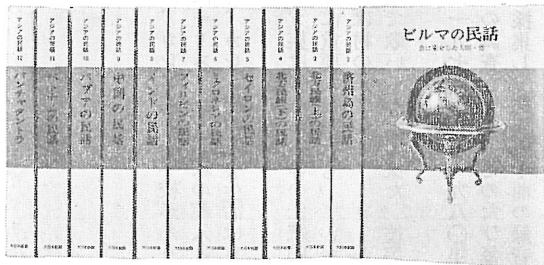
さて、北豆の田唄の伝承圏であるが、昔の駿東郡は北は小山町から南は沼津市までの範囲を含んでいた。そのうち沼津市は北豆に隣接し、しかも田方平野に接続しているという地理上の関係から、北豆の田唄に近似している。いまそれを示す紙幅はないが、北豆の田唄の分布圏に沼津市も含められる。かくて、伊豆地方には二つの分布圏が認められるのである。

(いしかわ じゅんいちろう・常葉学園短期大学)

民話の宝庫アジアの昔話を豊富に蒐集した決定版

アジアの民話 全12巻

監修 関 敬吾・荒木博之・山下欣一



◆全12巻の内容

- ① ヒルマの民話
- ② 九州島の民話
- ③ 北方民族(上)の民話
- ④ 北方民族(下)の民話
- ⑤ セイロンの民話
- ⑥ ミクロネシアの民話
- ⑦ フィリピンの民話
- ⑧ インドの民話
- ⑨ 中国の民話
- ⑩ パプアの民話
- ⑪ ベトナムの民話
- ⑫ パンチャタントラ

◆四六判上製、各巻約三二〇頁
◆定価 一八〇円〜三、二〇〇円

大日本絵画

東京都千代田区神田錦町1-7
〒101 TEL.03(294)7861代